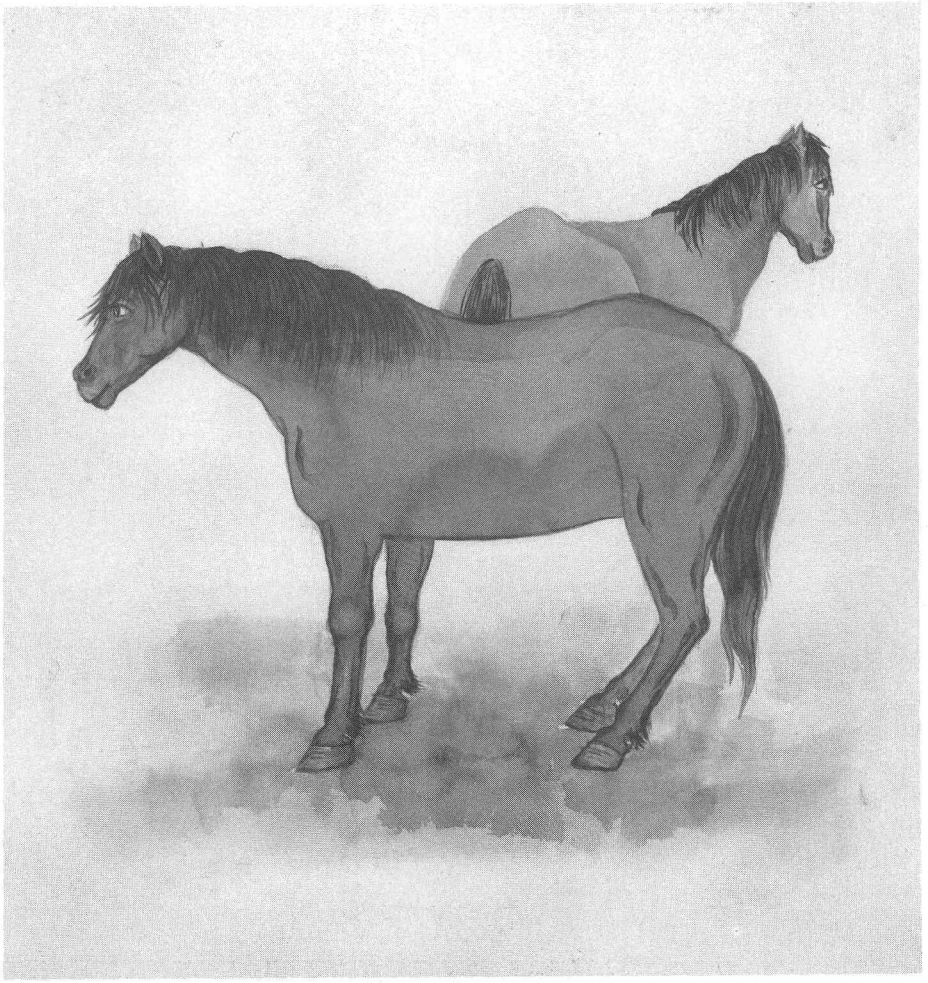


季刊

連句

第30号

平成二年九月一日発行



季刊連句 第30号 目次

| | |
|------------------------|--------------|
| 第三十号を迎えて(南柏雑記 28)..... | 1 |
| 連句の作り方 | 東 明雅..... 2 |
| 灰汁桶の雫 | 佐藤廣幸..... 6 |
| 「鳶の羽も」の巻鑑賞 (IX) | 東 明雅..... 8 |
| 「吉野」の恋句 | 秋元正江..... 11 |
| 「蓑虫」付勝練習二十韻 | 12 |
| 沙羅の会 | 14 |

| | |
|----------------------|--------------|
| 第三十四回 猫蓑会 歌仙七巻 | 18 |
| 捌 市野沢弘子 内田麻子 梅田利子 | |
| 米谷貞子 杉内徒司 中島啓世 | |
| 原田千町 | |
| 開かれた「猫蓑会」..... | 式田和子..... 22 |

| | |
|--------------------------|--------------|
| 鳴立庵の記..... | 品川鈴子..... 24 |
| 名古屋「笹」の会 | 伊藤敬子..... 25 |
| 二十韻六巻 | 26 |
| 国民文化祭ちば91 連句大会に向かって..... | 下鉢清子..... 28 |
| 雁帛往来 | 29 |
| 新刊紹介 | 21・23 |

第三十号を迎えて

南柏雑記 28

雅

季刊連句が今号で三十号に達した。昭和五十八年の創刊から七年余、この間、一回の欠号・遅刊もなく出し続けられたのは、編集・発行に直接助力して下さった方々の努力の賜であるが、それとともに私どもの連句に対する考え方を支持して、貴重な原稿をよせて下さった方々の厚意と、また、猫蓑会を中心とした連衆の方々の熱意に支えられたものであり、ここに改めて皆様にお礼を申し上げる。

この七年間に、連句の世界も大きく変わったように思われる。まず、連句復興というか、復活というか、その気運が社会全体に漲って来たことを痛感する。それを背景にして、念願だった国民文化祭への参加も、鈴木春山洞氏を中心とする方々の、献身的な尽力で、今年の愛媛県で実現することになった。そして、この国民文化祭へ参加する条件の一つとして、連句懇話会が連句協会へと改組された。また、私ども季刊連句の内部においても、従来、歌仙形式一本槍であったのが、昭和五十九年に新しく二十韻という形式が生まれて、今は歌仙と併用され、かえって歌仙形式を圧倒するようになった。また、季刊連句の母体である猫蓑

会も改組され、会員の数が倍増する勢である。

本紙の紙数も、創刊のころは毎号二十一頁で、それでも掲載する作品がなかなか弱ったが、いつよりか二十五頁に増え、今日では二十九頁になった。いろいろの会の作品が多くて載せきれず、いづれまた増頁しなければならぬと思っている。これも連句隆盛の一現象であろう。

思いおせば、季刊連句の創刊号に私が書いた「連句の復活とその将来」という一文の予言が、その通り実現しているというわけで、私としては非常に嬉しく、ますます、自分の使命を痛感している次第である。

それは、同じ創刊号の「発刊の辞」に、私は「先師（芦丈先生）の遺志をつぎ、先師から学んだ蕉風連句の種を蒔き、その芽生えを大切に育てて行こうと思う」と書いた。その種を蒔き、芽を育てる仕事は自分では果たしたつもりであるが、果して十分だったか否か。

さらにその文章の先きに、「庶民の文芸であり、座の文芸である連句に、芭蕉以来の不易の格を守りながら、現代の流行に即した新しみを求め、万人の胸の琴線にひびく作品を創り出すのが、私どもの究極の願いである」と私は書いているが、この理想にはまだまだ遠いような気がする。

季刊連句も三十、人間ならば而立のよい歳である。もう一度、初心に立ち帰って新しい決意で頑張ってみたいと思うので、皆さんの御協力・御支援を切に祈る次第である。

連句の作り方

東 明 雅

連句とは、Aという句にBという句を付け、そのBの句にまたCの句を付けるといふように、付けるということが基本である。そして、その場合、Bという句を中にはさんで、A句とC句とは、同種・同類・同量・同様のものであつてはならず、必ずA句とC句とは変化していなければならぬ。これを転じといふ。このように、連句は付けと転じによつて一巻が作られる。連句のメカニズムは付けと転じである。

それ故、よい連句を作り、あるいは鑑賞する第一歩は、一巻の付けと転じとがどのように行なわれているかにあり、これを探り知ることに始まる。

連句を芸術的に完成したと言われる芭蕉は、この付けと転じにそれぞれ独自の新しい手法を發明したのであつた。それ故にこそ、彼の俳諧(連句)は、それ以前のものと比較にならぬすばらしいものとなつたのであつた。

そして、その新しい付けと転じの新しい手法は、芭蕉の直門である向井去来・立花北枝・各務支考などの高弟によつて更に磨きをかけられ、さらに中興期の与謝蕪村・高井几童らに受けつがれた。ことに、高井几童(寛政元年没)

は、芭蕉の發明したこの付けと転じ、いわば連句制作の鍵を「付合手引蔓」(天明六年刊)という一書にまとめ、我々のために残してくれている。

私はここに、この「付合手引蔓」に倣つて、芭蕉が發明し、蕪村・几童らにまで伝わつた付けと転じの手法について述べてみたい。

まず、付けについてである。芭蕉が従来の物付(前句の中の言葉にすがつて付けてゆく方法)・心付(前句全体の意味によつて付けてゆく方法)の手法から飛躍して、いわゆる余情付けの手法を發見したことは、もう周知の事実である。「先師曰く、発句はむかしよりさまざま替り侍れど、付句は三変也。むかしは付物を専らとす。中頃は心付を専らとす。今は移り・響・句・位をもつて付くるをよしとす」(去来抄)という向井去来の言が示すように、貞門時代の物付、談林時代の心付の手法を脱却して、前句と付句との間に、読者の想像が自由に入りこむことのできる余地を作り出すことができた。物付・心付は連歌という親句、(前句と付句との間隔・距離が近いもの)にあたり、余情付は疎句(前句と付句との間隔・距離が離れて、遠いもの)

にあたるであろう。

余情付は誠に画期的な新しい手法の発見であった。これは簡単に言えば、前句の言葉や意味よりも、前句のもつ微妙な雰囲気や余情に依じて付けて行くものであって、その中に移り・響・句・位などの別があることは去来抄の示す通りである。現代連句から例をあげて説明しておこう。

○移り 檻ぬけし猿が花から花へ逃げ

陽に映え流る春川の塵

前句は花の句であるが、檻から抜け出た猿が満開の木から木へ逃げまわるといふ情景は、思わず吹き出したくなるようなおかしきがあり、明るい気分満ちている。付句はその浮き浮きした気分を鋭くとらえ応じているのである。前句の激しい勢いをやや穏かに受けとめているだけでなく、その勢いを一句中に映し、二句間に映発している点から、映りという意もあろう。

○響 ひびき ミンクを脱げば全裸なる美女

毒菓の罎がきらめく手の中に

響とは、打てばひびくといふところから出た言葉であるが、そのような前句の気分に依じ、そのひびきを受けて同じようなものを付け合わせるのをいふ。全裸の美女にハツと胸をつぶした驚きが毒菓の罎につらなり、ミンクのコートの美しさは付句のきらめくといふ語を受けている。このように緊張し、切迫した余情を受けて応じるのを響という。

○句 へヤピース取れば若妻少女めき

滝にかかりし円光の虹

前句は美しい若妻がくつろいでへヤピースを取り化粧を直している情景でもあろう。着飾った若妻の美しさはもちろぬすばらしいけれども、余計な飾りを取って生地のみしさと若さがむき出しになった時の感じはまた格別で、何かそれは眩しいような清らかさが満ちあふれている。付句は改めて説明するまでもないが、滝のしぶきの中によく円い虹がかかっているのを見ることがある。そしてその円い虹の清らかさと美しさがまさに少女の香を残した若妻の美しさそのものである。このように、この前句と付句とは意味の上では直接何の関係もないにもかかわらず、まったく余情が通いあっている。余情と言っても響や移ほど激しく、切迫したものでない点が異っている。

○位 ゐ 銀笛の緑陰遠くひびく時

恋に死なむと風の囁く

位とは前句の人物や事物の品格に応じたもので付ける付け方である。銀笛は貴公子が持つにふさわしいロマンチックなものである。そしてその貴公子の位に応ずる恋は、打算を離れて愛に殉ずるものでなければならぬ。

痴戯をする春婦に深き悲しみも

鮫鱒釣られ裂かれ煮らるる

肉体を売って生きて行く不幸な女性。それは魚にたとえるならば、鯛や鯉の品格はない。鮎の潑刺としたところ、

白魚の清らかさ、そんなものにも関係はない。男のするがままになる悲しみは、ちょうど鮫鱈が肴屋の店先の鉤につるされ、客の注文に応じて切売されるのによく似ているというわけである。位については二つとも恋の句で例を出したが、同じように去来抄にも恋句の例をあげて、位の説明をしている。読みくらべて味わっていただきたい。

以上で、芭蕉の付けにおける新手法についての説明を終り、続いて、彼の転じにおける新手法について述べてみよう。これはすべての句を人情自の句（句中の人物が自分のことを述べた句）・人情他（他人のことを客観的に述べた句）・人情なし（叙景・叙事の句）の三つに分け、それぞれが打越にならぬように考慮して行く手法である。

(打越) ヘヤピースとれば若妻少女めき (人情他)

(前句) 滝にかかりし円光の虹 (人情なし)

(付句) ハーケンに汗の飛びちる岩登り (人情自)

打越と前句は例の余情付(句)であるが、前句を実際高山の滝と見て、それに岩登りの若者を出したのである。このように人情なし(場の句ともいう)の句に、人情の句を出すのを起情の付けという。打越の若妻は人情他、付句は岩登りをしている若者が自分の実況を述べた人情自の句である。

(打越) 滝にかかりし円光の虹 (人情なし)

(前句) ハーケンに汗の飛びちる岩登り (人情自)

(付句) たばこの煙にむせぶだみ声 (人情他)

この付句は前句の岩登りしている人が、煙草をくわえながら登っていると見て、その煙にむせんだ訛声を付けたものである。このような付けを其人の付けというが、打越は人情なしであるから、付句は人情なし以外なら何を付けてもよいのである。

(打越) ハーケンに汗の飛びちる岩登り (人情自)

(前句) たばこの煙にむせぶだみ声 (人情他)

(付句) 猪鍋シメに獵友集ふ月の下 (人情他)

このように人情の句が三句並んでも、打越が自、付句が他となっているので、観音開き(輪廻)になる心配はない。自・他・場(人情なし)がそれぞれ打越にならないようにすれば自ら転じが出来る。さて、この付句は獵友が月下に猪鍋を囲んで手柄話にくつろぐ和やかな情景が眼に浮んで来る。前句のだみ声の人を見定めた付句でこのような付けを其人の付けというが、また考え様によっては、そのだみ声を聞いた場所を月下の猪鍋の場所と定めた付けとも考えられる。そのような付けを其場の付けと言うのである。さらに言えば、前句のたばこ・だみ声は付句の猪鍋・獵友と何か品格に近いものがある。位付でもあろう。

(打越) たばこの煙にむせぶだみ声 (人情他)

(前句) 猪鍋に獵友集ふ月の下 (人情他)

(付句) 爽やかな碑の個性ある文字 (人情なし)

打越が人情他であるから、付句は人情なら自、あるいは人情なしで付けるべきである。この付句は個性はあっても碑は碑であるから人情なし。猪鍋で気焔を上げている傍に

たまたまあつた碑を取り上げたまでで、このような付けを其場の付けと言ひ、前句を真正面から受け留めて付けるのではなく、その辺にあるものをちよつと取り上げてあしらつたものであるから、このような付け方を会釈の付けとも言うのである。打越の境地から鮮やかに転じている。

(打越) 猪鍋に獺友集ふ月の下 (人情他)

(前句) 爽やかな碑の個性ある文字 (人情なし)

(付句) 子規忌来る路通のあはれ思ふ日に (人情自)

前句は人情なしの句、これに人情の句を付けるのは起情の付けであるが、もつと具体的に説明すると、前句の碑は誰か俳人の書いた句碑でもあつたのであろう。そこから子規忌とか路通(芭蕉の門人で、乞食坊主と言われた俳人)とかを思い付いて付けたものである。子規とか路通とか人名はあるけれども、それは夙くの昔に歿つた人である。その人々を偲んでいるというのであるから、人情自の句である。打越は人情他の句、それだから、こゝは人情自の句でないことと転じがなくなることになる。

(打越) 爽やかな碑の個性ある文字 (人情なし)

(前句) 子規忌来る路通のあはれ思ふ日に (人情自)

(付句) 巴里落ちして戻るみちのく (人情自)

付句の巴里落ちをして故郷の陸奥へ帰つた人がたまたま子規忌に、不遇であつた路通のことをしみじみ思つてゐるという、前句の人の状態を叙べているから、其人の付けである。打越は人情なしであるから、付句は、人情自で転ぜられてゐる。また、打越が爽やかという季語のためか明る

い気分であるのに対し、この付句は、何か失意の人を連想させ、それが前句の路通のあはれとは非常に付味がよいのであるが、打越の気分からは一転している。このように前句の景状を正面から受け止めて付ける付け方を有心ウツクの付けという。

(打越) 子規忌来る路通のあはれ思ふ日に (人情自)

(前句) 巴里落ちして戻るみちのく (人情自)

(付句) チェリーブラッサムズ異国の客の眩くを (人情他)

巴里から帰つた人が、日本で外人の観光客の一団に逢い、オオ、チェリーブラッサムズと言つてゐるのを聞いたといふわけである。前句の人に對し、別の人を付ける、これを向付けと言ふ。この句は実は花の定座であつた。花の定座には、必ず花という言葉を出さねばならないが、この巻はすでに発句で餅花という冬季の正花が出ていたために、ここでは同じ桜を表わす英語を用いても許されるのである。

(打越) 巴里落ちして戻るみちのく (人情自)

(前句) チェリーブラッサムズ異国の客の眩くを (人情他)

(付句) 一年生の靴のピカピカ (人情他)

前句の観光客の来る春の頃はまた入学式のシーズンでもある。異国の客に交つた一年坊主の可愛らしい姿を描いたもの。前句の人に他をもつて付ける、これも向付である。打越が悲痛な暗い気分であるのに対して、この句はまことに明るく、あたたかで、ほほえましい気分ウツクに満ちてゐる。このように前句を挿んで、打越と付句とが気分まで一転している。これが転じである。

灰汁桶の雫

佐藤 廣 幸

灰汁桶の雫やみけりきりくす

あぶらかすりて宵寝する秋

凡兆
芭蕉

右は、芭蕉七部集の第五集『猿蓑』に収められた四歌仙のうちの一つの発句と脇である。化学洗剤が普及した今日、灰汁（あく）を實際使つて、洗濯をした経験をもつひとは、恐らく明治生れの僅かな御婦人だけではなからうか。大正生れの人の中には母親の洗濯するのを見て知っているという人が僅かにいる程度であろう。「灰汁」とは字義通り、薬灰に水や湯を通してできた、ぬめりのある石灰質の溶液である。大正八年（一九一九）生れの私は、幼いころ、明治十六年（一八八三）生れの母が、大島地か銘仙地だったか、着物をほぐして、家で洗い張りするときに、生地を痛めないように、灰汁を使っていたことをかすかに憶えている。そのころ俵などを戸外でもやし、そこにできた薬灰を丁寧に集めて火鉢の灰にしたり、また灰汁をとるためにこの灰を使っていたように憶えている。しかし灰汁桶となるかどうか、どんなものを使つて、どのようにして灰汁を作つたのか全く記憶にはない。

昭和四年、岩波書店より刊行された、東北帝大の教授連

による論議『芭蕉誹諧研究』の中で、明治十七年福岡県京都郡生れの小宮豊隆氏は子供のころを回想して、灰汁桶について次の様な具体的な説明をしている。「灰汁桶というのは、四斗桶の様なものに灰を入れて、夫に水をくぐらせ、その水が樽の様なものに灰を入れて、夫に水をくぐらせ、その水が樽の呑み口みたいな所から流れ出る様な仕掛になつている、灰汁をとる桶の事をいふのでせう。云はば灰で水を漉すわけだから、灰汁は雫になつてポタリポタリと、下の受の壺か何かに落ちる。それがちつとも音がしなくなつたと思ふと同時にきりぎりすが急に鳴き出した。といふのだらうと思ひます。僕の田舎の灰汁桶には呑口がある。『倭漢三才図会』にも同じ様な絵が載つてゐる。僕の田舎の百姓家を例にとると、家の内部の半分が土間で、半分が畳の間だ。その土間を庭と名づけて、そこに俵を積んだり、唐臼を置いたり、味噌桶を置いたりする。従つて僕はこの灰汁桶のありどころを、かういう土間の片隅に想像する。」このように小宮氏の説明が大変具体的であるだけに、それ以後に出た『猿蓑』の註釈には殆んど、この小宮説を敷衍したような、小宮説と大同小異な灰汁桶の解説になつていた。私はそれらを読んで、昔は田舎では、どここの家庭でも

四斗桶ぐらいの大きさの灰汁桶が設けられ、下部の栓口から灰汁が流れ落ちるような仕掛けになった灰汁桶が据えられていたのかという素朴な疑問を抱いていた。

昭和二十六年、三省堂より刊行された芭蕉講座の樋口功氏（明治十六年、新潟県西蒲原郡生れ）の連句評釈には始めて、灰汁桶を、「桶の上に灰を入れた箆を置き上から熱湯を注ぎ、桶にたまった水を洗濯に使う」という説明になっていた。私はこの解説でそれまでの疑問がとけた思いがした。小宮氏の実家は田舎でも、庄屋か、それに準ずる大百姓の家柄で、灰汁桶にしても当時の一般農家のものとは類を異にしていたに違いない。

もう一つ灰汁桶の具体例を記しておこう。昭和五十一年に刊行された、小島吉雄氏の『芭蕉と奥の細道とどこどころ』の中で、小島氏（明治三十四年、大阪府北河内郡生れ）が、少年のころの記憶にもとづいて回想した灰汁桶を次のように記している。「わが少時まだランプを使っていたころのことである。箆に灰を入れて桶の上へのせ、その灰の上から箆一杯に水を張っておくと、灰汁が箆の目を通って桶にしたり落ちる仕掛けにして、大抵夜の間は灰汁を取っておくのが、京阪地方の田舎家の習わしであったが、わたくしは、少年時代に土間の隅においてある桶に箆から灰汁がポトンポトンと滴り落ちるその音にまじってその桶の蔭に鳴くこおろぎの物乞いときれときれの声を聞いた秋の夜ごろをこの句から、まざまざと憶い起すのである。」より一層具体的な追憶談である。

私は樋口氏とそれにつづく小島氏のこの回想を読み、これこそ凡兆が詠んだ灰汁桶で、どこか家庭にもあった至極簡単な空桶を利用した生活用具だと思ふようになった。小島氏が言われるように、「俳諧の鑑賞には特に風土的体験に随伴する感情の作品への移入が重要な役割を果す」とはまさに至言だと思ふが、かなしいかな現代のように大きく生活様式が変わると、こうした感情移入も不可能になってくる。

芭蕉と殆ど同時代を生きた、江戸初期の一流の本草学者人見必大の著作『本朝食鑑』が、近年東洋文庫から、島田勇雄氏の訳註と詳細な解説を付けて出版された。その第一冊に次の様な参考になる記述があり、先きの小島氏の回想にピッタリ重なり合う。「阿久、凡そ稱草の灰を水に漬けて淘籬たうりに盛り水が流れ尽きると復水またを加え、こうして下の桶の中に垂らし漉して出来た灰水を俗に阿久という。これは衣服の古い垢を能く除く。」

『猿蓑』の巻かれた元禄時代には、この様な藁灰と箆と桶をよる簡単な方法で洗濯に必要な灰汁が作られたという確信をますます深めることができた。しかし未だ『猿蓑』の注釈の中には、何んの疑問も抱かずに、紺屋や染屋の営業用や大家で使うような大きな灰汁桶が一般家庭で使用されていたような錯覚を抱かせる解説をしているものをまゝ見受ける。良心ある態度とはいえない。

私は最後にもう一つ、明治三十一年、福井県大野市生れでその頃大阪府柏原市に住む知り合いの老婆から数年前、

灰汁桶を實際使った人の話として聞き出したことを次に書留めておこう。

「灰汁で洗うと染めが落ちず、よく洗濯ができたものです。灰汁桶は一斗桶ほどの家にありあわせのものを使いしました。その桶を台所の片隅におき、箒をその上に乗せ、その箒にこれもありあわせの使い古しの木綿切れを敷き、その上からお椀に水を汲み、日に何度か注いでおくと、箒から下の桶の中にポトリポトリと灰の中を通ってきた雫が滴り落ちてアクがたまります。これをお椀ですくいあげ、お湯をませ洗濯に使います。相当ぬめりのある液で、生地を痛めずよく垢が落ちました。灰はいろいろの灰を使いましたが、わらを焼いた灰が一番です。」

これまでの話を総合すると、『猿蓑』の古註の中では次の柳津魚潜の『附合考』の註が最も適切ではないかと思われる。「灰汁桶は背戸うらの口の軒下塵塚などの傍に有事、なべてのさま也。秋のすへ、洗ひ物の用意にとて、古き桶

取り出して灰たるゝいかきに、藁灰の雫の落たる音やみたるに、針業（筆者註、針仕事のことか）のいとまなきさまでもおもひやられて哀なり。」伊藤正雄先生が言われている通り、「昔の常識が現代の常識でなくなっているところに俳諧解釈のむずかしさがある。」と、これは芭蕉の脇の句にも言えることで、「油かすりて」についても諸説があるが、私は前述の小島氏が述べる次の説に賛成である。「秋の長夜、夜なべでもしようと思っていると、行燈の油が切れたようである。油を差そうとして油壺を取り出したが、それにもない。かすってみたけれども一雫ほどしかない。今さら油を買いにゆくのも億劫だから、ええまよとそのまま宵寝してしまふ。」元禄七年六月二十四日付杉風宛芭蕉書翰に「米びつの底かすらぬやうに致せ」と記したのと全じ用法で、すでにものがなくなっている意味が含まれているという小島説が私には当たっているように思われる。

「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (IX)

東 明 雅

28

せはしげに櫛でかしらをかきちらし

おもひ切たる死ぐるひ見よ

(雑。人情目)

(現代語訳)

史邦

に掻きつけ、死を覚悟の奮戦ぶりを見よとばかり、敵陣

に斬って入る。

(付心) 其人の付。

(付味) 前句の非常に緊迫した状況・気分を受け、付句もまことに容易ならぬ決意を付け、内容と言ひ、表現と言ひ、相呼応して、激しい気魄を感じさせる。響の付の好き見本である。

(転じ) 打越・前句の恋の気分から一転して、戦場の修羅場となった。転じは十分である。

(補説) 私の解釈は天野雨山(「猿蓑連句評釈」)・宮本三郎(「校本芭蕉全集」)の説を受けたものであるが、古来の学者の多くは、前句を女性と考えたため、解釈に窮したものが多し。その中にも

○前句を女性と見、付句も女性として、「思乱れたる女の終に思決めたる所」(「露伴評釈猿蓑抄」)、「女のいたく取乱した体」(浪本沢一「芭蕉七部集連句鑑賞」)などと解している。

○前句を女性、付句を男性と見る説、「意の上の繋がりはや、漠然となった憾みがある。それは前句はどうしても女であるべきだが、この句の死狂ひはむしろ男と見られるからである」(顯原退蔵「日本古典読本芭蕉」)などの確かな解が付けられないもの。

○前句を女性としたが、付句の時には見立替えて男性としているもの。「飯盛女の卑しい仕草を武者の体に見替へたのだから、多少の無理は致し方なく、兜下地の髪を梳るさまと見做したとすべきであろう」(阿部正美「芭蕉連

句抄第八篇)

○から○まで、前句「せはしげに櫛をかしらををかきちらし」を女性の句と見れば、いろいろの無理があり、付句と辻褃を合わせても、どうしても不自然さが残るのである。

この句は、前句にあった恋の意を転じて軍体にし、戦場の勇士のさまとしているので、何句か続いた恋の気分も一掃した「恋離れ」の付け方である。

また、「瘦骨の……」の句から、この「思ひ切たる……」の句まで六句、すべて人情の句である。俳諧(連句)は、いかに美しい叙景の句人情なし(場)の句を続けても、決しておもしろくはならない。一巻のいわばヤマ場ともいふべき盛り上がり場面は、必ずこの人情の句の続いたところであるが、この人情の句をうまく「三句の転じ」を果たしながら続けることは大変難しいことである。俳諧(連句)においては、このような付合を「逆茂木」と言った。「逆茂木」とはもともと、敵の侵入を防ぐため、茨や木の枝を逆立てて垣に結った防禦物のことであるが、俳諧(連句)の道では、このような障害物をのりこえのりこえて、連衆が「三句の転じ」をはかりながら人情の句を続け、一巻の興を盛り上げるのを言うのである。この所の六句は、「瘦骨の……」(人情自)、「隣をかりて……」(人情自)、「うき人を……」(人情自他半)、「いまや別の……」(人情自他半)、「せはしげに……」(人情他)、「おもひ切たる……」(人情自)と、打越が同じものにならぬよう工夫しながら続け、盛り上げていく。「此場や巻中の遊び所にして、

反覆往来曲節を尽せる虚実の虚実も、豈外にもとめんや」
（「俳諧古集之弁」）、「瘦骨といふより、こゝに至て人倫
六句変化の手段、俳諧最一なり」（猿蓑四歌仙解）という
ような賞讃の辞が多いのも当然であり、まさにこの「鶯の
羽も」の巻の白眉として、芭蕉の作品中でも、最も光彩を
放っている個所と言えるであろう。この句については先号
に佐藤廣幸氏の貴重な説がある。再読して欲しい。

29

おもひ切たる死ぐるひ見よ

青天に有明月の朝ぼらけ

（秋。有明月。人情無）

去来

（現代語訳）明け方の青空には残月がほのかにかかり、
戦士たちは勇氣凜々として、決死の働きを見よと打って出
るのである。

（付心）遁句。天相の付。

（付味）響。まず前句の激しい気分に応じて、「青天に」
と強い調子で打ち出したところが、響きあっている。月の
定座として月を出したのであるが、単なる叙景に終らず、
内容としての澄み切った青空は、思い切った人の爽かさを
象徴し、「ありあけ月のあさぼらけ」の韻を踏んだ響きも
効果的である。

（転じ）打越は人事、それも何か落ちつかない、いらい
らした状態を現わす句であったのに対して、これは全く人
情無、しかも静かに澄みきった気分が漲っており、転じの

お手本のような句である。

（補説）ここは月の定座である。前句まで逆茂木が続き、
しかも極限の情にまで達している人情の纏れをどのように
捌いてどのような月を出すか、一座の者が固唾を呑んで見
ていたであろう。それに応えて、これまでの人事を一転し
て、豁然とひらけた叙景の月を出し、付味・転じ、まさに
理想的な境地を示している。これは芭蕉随一の門人と称さ
れた去来にしても、誇るべき傑作である。浪花（一六七一
―一七〇三）の「蕉門俳諧随聞記」には、前句からの付合
を出して、「是すぐき場のがさぬ句、大事也と、翁も称美
（し）けるとなん」と伝えている。まことに「猿蓑」の中
でも特筆さるべき好付句の一つである。

私は、この句を見ると連歌の「菟玖波集」（一三五六序）
に出ている有名な付合、

罪のむくいはさもあらばあれ

月残る狩場の雪のあさぼらけ

救済

を思い出す。この付合は「連歌十様」（二条良基著）、「筆
のすさび」（一条兼良著）、「延徳抄」（猪苗代兼載著）な
どに絶賛されている有名なものであるだけに、去来がこの
句を付けた時、彼の意識のどこかにこの句が存在したの
はないかと思うのである。これはもちろん想像であり、学
問的根拠はない。ただ、私にはどうしても、この二つの句
が何らかの関連があるのではないかと思われるまでのこと
なのである。

「吉野」の恋句

秋元正江

連句集「吉野」は、ACCで明雅先生に学ばれて伝道書を受けられ、武翁賞を受賞された猫蓑会の会員八名が、昭和五十九年十一月から、平成二年二月迄に巻かれた歌仙二十七巻、二十韻六巻が入っております。

先ず表紙のページ・白・濃い紅の色襲ねのシンプルな装丁に目を奪われ、じっくりと歳月を重ねて醸された連衆の呼吸が読みてに伝わってくる感じが、昭和から平成に移るはざまのあたりしみを持った連句集でした。

連句の鑑賞は一句一句のおもしろみ、付心、付味、三句目の転じ、序破急、遣句、遁句、玉がころんでいて、つぶがあるかということでしょうが、一巻の中で月・花と同じく大事なすばらしい恋の句、それに釈教、病体の句も入れて書かせて頂きました。

オレンヂの香に懐しむヴァレンシア

黒人ボーイカフス真白き

一病ありて継ぎし神職
水槽に電気鰻の沈みをり

冬薔薇溢るマジヨリカの壺
青空に熱気球浮く綱とかれ

誰も知らない誰も見てない

思ふこと妻とたがへり描なでつ
彼女のキーのまじる鍵束

二十韻 正雄
花辛夷 みづゑ

モジリアーニをもじりたる顔
背伸びしてくちづけしたる朝の駅

歌仙 貞子
新涼や 弘子

すつきりとぬけぬ夏かぜもて余し

ふと思ひ出す故里の山

歌仙 淳子
卒業や 弘子

白き竜神赤き火を噴く
足の爪切らせることも愛のうち

歌仙 正雄
紅葉濃し 遊

寂聴尼嵯峨野の庵も住みあきて

ちりめんじゃこで啜るお茶漬

二十韻 瑞枝
平成の御代 淳子

叩いて干してゆがむ夏足袋

逢ひたいと書くに書かれぬ暑気見舞

歌仙 淳子
引きゆく鴨 和子

エメラルド隠れるほどの胸の谷

成績トップ保険セールス

歌仙 貞子
冬薔薇 瑞枝

集中、歌仙では「梅雨晴間」の森羅万象をたくみに切りとって、しおり、おかしみに溢れ、二十韻では「万愚節」に、一巻の中に充分歌仙の内容、ゆとりを持ったかきみにかれました。今後のご精進をお祈り致します。

蓑虫

付勝練習二十韻

東明雅

投句締切
10月20日

蓑虫の音を聞に来よ艸の庵

初めて涼し掛けし濡縁

海岸線波頭真白に月ありて

ウ 飛ぶやうに行くホパークラフト
心太芥子きかせてすすり込み

制服脱いだ彼とくつろぐ

さりげなくお守りだよと犬はりこ

回教国は酒も御法度

バザールに水煙草吸ふ男たち

ナ 見えれば摩耶のあたりに雪しまく

客待つ暖炉あかあかと燃え

十三句目

治定

据ゑ膳は食はぬと言った嘘もばれ

1 チョコレートつまみつつ読むラブレター

2 響き来る曲は皇帝圓舞曲

3 仲人を頼むと恋の占師

4 先生も時には迷ふ恋の道

5 どうしても捨てられぬ文かくし持つ

芭蕉 正雄 千遊 淳子 よしえ 元子 和久 良子 正雄 鋭太郎 達子 志げ子 智恵 美幸 鋭太郎 義人 妙子

※が残念である。6これも2と大体同じ情景である。ただ、喫茶店という言葉は入れない方がよかったのではなからうか。「B・G・Mひそやかに楽流れをり」位の方がおもしろい。7前句にびったりの付味で、一句としても人情他の句で申し分ないのであったが、残念なことにはいささかおとなし過ぎるというか、ここはナオの恋であるから、もしこしあばれて欲しかった。8現代風俗の一面を取り上げおもしろい句、ただ大打越に美術館があるので、式目上は二句離れて差支えないだろうがやはりちょっと気になるのである。9これも現代風俗の一面であろうか。お見合だから自他半であるという考えもあるが、かけもちでやっているのは自分であるから、これも自の句と見るべきであろう。10これはまたすごい句が出たものである。お化け屋敷にでも入ったかのように、こうなれば、あかあかと燃えている暖炉も何となく気味の悪いものに見えて来る。付味もよく、転じも利いているし、一卷の中にこのような妖怪味のあるものを入れるのも変化があってもおもしろいが、このあとをどう処理するかが問題であり、また、恋の句をここは頂戴したいので採用しなかった。11これも現代風俗の一面であろう。子供たちは学校から帰っても、昔のように友達と外で遊ばずに、ひとりでファミコンゲームに夢中になっている。これでいいのかと心配するのだが、この句、前句にはかすかに付き、転じもよい。12このような気分になることは誰でもあり、おもしろいと思うのだが、この巻ではすでに回教国が出ておりその風俗も出ているので、さらに異国

- | | | |
|----|---|-----|
| 6 | BGMひそかに流す喫茶店 | 美鈴 |
| 7 | 母に似し女の情の濃やかに | 雅代 |
| 8 | カラオケの設備も出きし公民館 | とも子 |
| 9 | お見合もあちらこちらとかけもちし | 欽吾 |
| 10 | 丑三つの空屋にどっと笑ふ声 | 道郎 |
| 11 | 新品のファミコンゲームに兎は夢中 | 謙太郎 |
| 12 | 常夏のハワイへ行つて暮らさうか | 千雪 |
| 13 | 何事も見て見ぬふりの幫間 | 八郎 |
| 14 | 背の君に心尽しの茶懐石 | 均 |
| 15 | 仲人の約束の刻娘居す | 幸代 |
| 16 | 大胆なサイドスリット黒ドレス | 智子 |
| 17 | 縁談に王女のごとき夢を追ふ | きみ子 |
| 18 | 聞え来るあれは亡者の登音か | 美代子 |
| 19 | 断りに来た縁談を言ひ出せず | 雄次郎 |
| 20 | 夫より塾帰りの子大切に | 美和 |
| 1 | 1 チョコレートを食べながら恋文を読み、その恋人が来るのを待っているという情景はよく分かり、おもしろいと思う。ただ、打越が自の句だから、「チョコレートつまみ恋文読む女」とでもすれば、他の句になるが、それでは原句のおもしろさはなくなるだろう。2 前句を喫茶店と見立てた場の句、軽くてよい。3 一句の意味が不分明で、前句は占師の店の有様かとも思ったが、どうもしっくりしなかった。4 前句と非常に離れて付けているところはおもしろいが、一句としてはあまりにも平凡すぎる。5 この句も1と同じく人情自の句であろう。付味はおもしろいのである※ | |

を出すのは如何かと思われる。13 幫間は太鼓持ちである。遊女とお客がどんなことをやっても、見て見ぬふりをするのが、職業上必要というわけであろうが、これはおもしろい恋の句であろう。14 客設に茶懐石は実にぴったりであり、ぴったりすぎる位である。しかもその茶懐石は御亭主のため心尽しのものであるとなれば、これもあまりにまともすぎよう。悪いとは言わぬがおもしろさは生れないのである。15 仲人さんが来るというので家中大騒ぎしているのに、当の娘は結婚の相手が入らぬのか、プイと居なくなってしまう。困りますね。このごろの若い娘は、フロントニ16はその家の女主人公の服を述べただけであるが、これだけで恋の句としては上々である。付味もよく、転じもよい。ただ、裏の恋句に「制服脱いだ彼とくつろぐ」という句がある。採用できなかつた残念である。17これも恋句としておもしろいが、人情自の句であろう。18これは10と同じ妖怪趣味の付句で、負けず劣らずの凄味のある句である。おもしろいが10と同じ理由で採用しなかつた。19こんなことがよくあるもので、一句としてはおもしろく、自の句めいているが、話の相手がそこに居ることは明らかで自他半の句と見るべきだろう。20これも男性軽視の風潮の一端、慨嘆にたえない。さて、治定の一句、据ゑ膳とは女性が男性に迫ること、そんなことはいやだと言っていた男も、もてなしのよさについふらふらと応じてしまったという、ちょっと悪どい句であるが、ナオだからこの位の迫力はあつてもよいだろう。次はこの恋をもう一句続けて下さい。

沙羅の会

歌仙四卷

平成二年五月三十日
於 京橋区民館

五月尽

東明雅擲

金の酒箔ひらひらと五月尽

色青々と皿のそら豆

子らの声プールサイドにはしゃぎあて

ベンチで開く読みかけの本

有明の面をよぎる大鴉

ウ こっそりと行く茸狩りの人

秋惜しむ身をしみじみと山の湯に

自由にさせて愛してるなら

国籍は問はず言葉はいりません

いらぬ車をだまされて買ふ

門前にどっかりすわるブルドッグ

寒橋の音とぎれとぎれに

はみ出した布団の男足に月

夢のまた夢還暦となり

流水算鶴亀算に植木算

和食洋食中華食堂

額づけば靖国神社花吹雪

老のうららに聞香の会

ナオ 百千鳥着々すすむロケーション

静まりかへる人魂の池

瓜むきてもてなす媪くになまり

レーゲルックのかしこまる膝

うすうすと口のうぶひげお坊ちゃま

気をつけなさい女狼

思ひきり抱かれて息のつまりさう

カランひねればほとばしる水

ミヤンマーの仏舍利塔に葬りしか

ひとかたまりに曼珠沙華咲く

澄む月に新走りなど酌みかはし

ナウ こほろぎ鳴けば思ひ出す母

政権のちよつと遠のく土井たか子

ゴルフしながら草を抜くなり

毎日が日曜日なり雑魚すくふ

坂の上には陽炎のたち

振袖の三尺あまり花衣

雛の調度につけし定紋

代 恵 和 達 代 弘 雅 代 達 和 恵 代 弘 恵 和 代 恵 達 和 代 弘 雅 代 恵

南風

並木眩し胸一杯に南風

更衣して社員颯爽

湯沸器いろいろの声聞こえて

エッセイ書けばいつも長すぎ

明星の近づいてくる三日の月

ウ 蜻蛉とまる濡縁のへり

発心の不惜身命秋小寒

「実は」と娘ハッとする親

コンピュータ不倫願望までは出ず

シャイなところがちよつと絵になる

吉兆の茶懐石にてお正客

家代々のかまど猫棲む

森閑と月の光の冴えわたり

夢ひとつ消し拾ふ幸せ

新喜劇笑ひつづけてみて涙

道頓堀に映る紅い灯

花びらを浮かべし酒のなみなみと

笛の音そろひ安良居の傘

正千正貞利澄

雄町江子子子江町雄

ナオ しゃぼん玉児があゆみ出す靴を持ち

間違ひ電話何回となく

あつてなき値段告げらる骨董屋

雨のそぼ降るパリの巷角

黒ドレス、ムーランルージュの羽根扇

目くるめく夜の襟もとのあざ

許してと書かれし文字のささ乱れ

晶子の歌に荒るる冬涛

奥の部屋座敷わらしのいるやうな

看とりやさしき孫嫁の粥

月団々はすむが如く山を出づ

銀色の皿錆びる露霜

ナウ 借りてきしアニメの源氏実紫

書店やりくり難しくなる

常に世の下積みとして老い迎へ

春の珍事かホールインワン

散りもせで花の重たさかさね合ひ

あふれる如く鳥の囀り

氏原正雄 捌

江町貞澄利貞江町江町江町貞同澄町澄雄利

金魚草

親に似し小犬育ちて金魚草

濡縁の端伝ふ黒蟻

サーフアリーのボードきらめく海原に

バーベークューにはマシユマロを焼く

引越の荷物に月の影長し

新聞配達霧の中より

警策の音聞こえて散る銀杏

鏡見ながら伸ばす口髭

ハネムーン送るグループ間違へて

成田離婚の流行る此頃

泰西の名画買ひ込むお宅族

千鳥の歩く水涸れの川

信玄の隠しいで湯に月冴えて

引売りの品あれこれと選る

持病出て明日の天気がよく当り

愛用ベスト七つポケット

ベカ舟の竿に崩るる花筏

山になぞひてかかる初虹

麻子

淑子

啓世

淳子

好敏

みづゑ

淑

敏

世

淳

ゑ

敏

世

淳

淑

ゑ

敏

ゑ

^{ナオ}春闘の似顔絵かかげのびやかに

コルクの落ちたブランデー飲む

鹿革の手帳びっしりスケジュール

合併会社々名きまらず

岩燕住みつくと言ふ中華街

朱実命と腕に入墨

そっとピル飲んで今宵も荒稼ぎ

湖畔の宿をくちづさむひと

蹴轆轤を用ひ陶工井戸茶碗

旅の土産のビーフジャーキー

月面を歩く夢みて醒めにけり

足をちぢめて漸寒の朝

^{ナウ}落ち鮎の瀬淵わかたず流れつつ

蘭更・北枝墓を並べて

境内に輪投遊びのきりもなく

はんこたんなで畑を打つ人

花衣宝づくしの帯を締め

カリオン時計麗らかな空

内田麻子捌

世

淑

敏

ゑ

淑

ゑ

淳

世

淳

淑

淳

敏

世

淑

ゑ

淑

麻

敏

忙中の夏

忙中の夏を京橋あたりかな

新茶のびらの揺れる軒先

キャンパスの絵具の色の極まりて

靴を磨いて過す週末

見上ぐれば雲の絶え間に月浮かび

邯鄲の音を友と聞きあゝる

秋蘭けて静まりかへる御師の家

ワンダーフォーゲル広げたる地図

七宝のロケット彼の写真秘め

受話器にちゅっと甘きくちづけ

朔太郎の青猫膝をかかへ読む

素人離れの株と麻雀

枯れ果てし河原を濡らす月の光

百鬼夜行に出会ふ凍て道

マツカリをキムチ肴に酌み交し

大統領をやっと送って

子の頬に咲き満ちし花耀へる

風琴ひびく暮れかねる頃

清子遊

元子遊

瑞枝

杉亭

遊亭

亭枝

枝遊

枝遊

元枝

清遊

遊元

遊枝

元枝

枝元

枝元

枝元

枝元

枝元

^{ナオ}揚雲雀落雲雀とて友雲雀

ドームはるかに望むフィレンツェ

伝来のレンピノートを娘にゆづり

小紀^{コノリ}老礼と仇名呼び合ひ

自転車で恋の坂道かけおりて

抱擁あつく草茂る中

銀鱗の光りて鮎のまた釣れぬ

肩パッドほど肩書を持ち

心労の重なる果の脱毛症

同窓会を取りしきる奴

たらちねの有明月の夢に現れ

^{ナウ}露くさ描きし懐紙取り出す

ひいやりと伊万里の壺の藍の肌

馬身じろがぬ蹄鉄屋前

泣き笑ひ喜劇人生幕を閉ぢ

ジョギングの背に雨の霽れゆく

パラボラのぬうと覗きし花の山

紙飛行機を飛ばす野遊び

下鉢清子捌

亭元

元遊

遊亭

亭遊

遊枝

枝遊

遊清

清元

元枝

枝同

同遊

遊枝

枝元

元亭

亭元

元清

清亭

亭元

第三十四回 猫 蓑 会

歌仙七巻

参加者四十名

平成二年七月十八日
於 関口松声閣

噴 水

市野沢弘子 捌

極 暑

内田麻子 捌

夏 木 立

梅田利子 捌

噴水の風にくづるる白さかな

蝉時雨して公園の午後

夏座敷新しき顔集りて

歳時記を繰り案ず七七

十日月生まれなむ児に語りかけ

衣被盛る竹の編笠

弘子

元子

澄子

久美子

正敬

啓子

四肢投げて猫の寝て居る極暑かな

青葉がくれに登校の子等

船見ゆる島に潮騒ひびくらん

イーゼル立ててパイプくゆらす

テレビ塔久に晴るれば細き月

鬼灯さげて帰ってくる人

麻子

篤子

正雄

淳子

よしえ

雄

街騒を鎮めて深し夏木立

短き影の灼くる舗道

もの言はず製本はげむ親子にて

顎ではさんだコードレスフォン

小魚港ほどほどの荷を揚げる月

西南西にかりがねの列

利子

瑞枝

みづゑ

隆一

郁子

良子

乃木祭地下足袋穿きのギャルもゐて

ロックギンギン彼の手拍子

此の頃は学生結婚大はやり

鳩は自由に空を羽搏き

東から西へ流るる人の群

揺椅子に編む毛糸ふかふか

北海の雪像照らす蒼い月

夜学子の集ひ賑か喫茶店

恋文渡す相手間違ふ

金婚式迎へていまもそそっかし

髭の手入れに一家言あり

マンションの持主今日も畑仕事

汽笛消えゆく多摩の横山

月冴ゆる雲ひとつなき中天に

蓑虫の鳴き声求め旅ひとり

おみくじ引けばいつも末吉

好きな彼誘ふ彼とは別な彼

振られ上手とうそぶいてゐる

時勢には勝てず明治座取り壊し

育児休暇でストのパパ族

月凍ててスパイスに凝るキャセロール

同

枝

郁

一

ゑ

良

ゑ

家業継ぐ友送る駅頭

定座には十五年棲む犬と爺

明治の時計ゆったりと鳴り

童話書く眸を上げて花仰ぐ

遍路姿の速くなりゆき

春埃つけたるままの旅靴

何はさておき升で一杯

五千万保険をかけてゴルフ狂

「ごめん下さい」笑ふセールス

からげたる藍の浴衣の裾おろし

恋の梯子で目の下に隈

会議中ひっきりなしの大欠伸

貴方お掃除わたしパソコン

泰山も鳴動するや地震しきり

鴉三羽がかあかあかあと

船頭の手早く料る裂鱈

月の出待ちて煙草くゆらし

秋深し故郷の母へつづる文

人間ドック無事にすみしか

天気予報曇のち晴または雨

入学の子と道具揃へぬ

庭先に立てば再び花吹雪

畑打終へて帰る畦徑

敬

澄

元

同

敬

美

同

啓

澄

元

美

敬

澄

同

美

元

美

元

澄

敬

啓

弘

敬

湯上りの身をつつむ綿入

光太郎智恵子モデルに像残し

残る鴨ゐて送る引鴨

乗りつぎて単線列車花の雲

春惜しみつつ斑鳩の旅

種案山子ロングスカートはきて居り

故郷村に亀も鳴きける

どよめきて高校野球県予選

勝っても負けてもアルコール抜き

言ひ訳は言へば言ふ程嘘めきて

いぢめてみたいにくくなけれど

里帰り新婿どのに何あげむ

足らぬものなき平成の御代

ガラス戸の向ふさわさわ作り雨

コール首相の通貨統合

運命の扉開けば月射しぬ

芋殻は燃えておきとなり果て

下り築長靴の爺見回りに

サンドイッチに芥子利かせる

シーバース二十一年開封す

表装の出来共に気に入り

花吹雪浴びつつ友と源氏山

利茶の香り乗せてくる風

篤

え

篤

淳

え

淳

篤

雄

え

篤

雄

淳

麻

篤

え

篤

雄

淳

同

え

雄

麻

え

暖炉の上に羚羊の首

村おこし家具職人の招かれて

飛驒の地酒を廻し飲みする

花篝どっとくづれる囃し唄

踏みつぶされし土堤の蒲公英

伎芸天秋篠寺を訪ふうらら

カメラマニヤの鞆重たく

傑作が贗作となりお倉入り

地上げ済みたる路次の森閑

よるづ屋にまだ売っている蚊遣香

白靴はいて骸骨のシャツ

モルジブの黒き魔性の肌を抱き

一夫多妻は男冥利か

四十五で翁と呼べる芭蕉様

連句広むる夢は無限に

重畳と続く山の端月出づる

浅瀬の石をつたふ落鮎

風炉名残正客となる鬮り口

背筋のばして掛ける条幅

塾通ひ子供は遊ぶ暇もなく

フェアウエイへ穴を出た墓

凡庸の日々は好日花の駅

春風いっぱい胸に吸ひ込む

枝

同

良

枝

良

郁

同

一

枝

ゑ

郁

ゑ

一

利

一

枝

良

ゑ

郁

枝

利

一

ナオ
それぞれに現地解散伊勢參

社長で部長小使も兼ね

貸ビデオひと晩二百五十円

齡はうん才声美人なり

近づいた男はすべてなめくぢに

ペティコートにつきし干草

単線の電車はしれる町はづれ

働きづめに過ぎて幾とせ

漸くに亭主も呆けのはじまりぬ

伎楽面めくもの言ひやう

夢のごと沖の不知火月淡し

陸上競技はげむ朝寒

ナウ
野仏にそなへし通草もらひたる

旅芸人の憩ふ温泉の宿

担いだる太鼓三味線合はせつつ

ぴりりぴりりと張りしうすらひ

花の屑散らし書きする継色紙

体重計に乗りてうららか

ナオ
鶯の真似する鶉鷓春惜む

沖波寄せる崖に画架立て

ひとり言聞かれて仕舞ひ照れ笑ひ

奴のカマトトすぐに地が出る

紙おむつ替へて飲み干す大ジョッキ

巨人の勝ちのつづく宵々

左棲とってこぼれる緋縮緬

文弥新内紺の角帯

パソコンの手帳にすべて入力す

かって算盤一級の腕

月中天六目置けどまだかてず

露あびてわが猫戻りくる

ナウ
冬仕度して書直す遺言書

長電話かけ過ごす半刻

塾帰り子らは明るく鞆振り

雪代山女ひそむ溪谷

地母神のづんと守りしか花大樹

定家の春の夢の浮橋

ナオ
春日の遅々とわが詩わが生活

信如、みどりの墨東も古り

建ち並ぶマンション群は防火帯

バードウイーク鳥籠を買ふ

父好むてっせんかづらなつかしみ

見かけだふしよ男嫌ひは

燃えつきて灰となりても悔はなし

抑留解かれ帰国する船

ただよひてソ連経済どこへゆく

「ダー」とうなづく黄昏の空

糞虫の庵をたづぬる月の下

からたちの實を拾ひ上げたる

ナウ
きつつきの穴そこここに峠道

鳥打帽の探偵のみて

網棚に荷を置く老いのもの忘れ

テニスコートの増ゆる郊外

房咲きの花の朝日に勾ひける

うつらうつらとふらここの夢

☆ 新刊紹介 ☆

定本岡本松濱句文集

俳道一筋を貫いた不滅の句業。正岡子規選の新聞「日本」によつて句作に入り、明治の太祇、人事句の名手とうたわれた異色の俳人岡本松〇。没後五十年を期して初めて刊行する珠玉の句文集。

岡本春人編

富士見書房 七〇〇〇円

代子風津代 子風津代 子風津代 子風津代 子風津代 子風津代 子風津代 子風津代 子風津代 子風津代

睡蓮

開かれた「猫蓑会」

原田千町 捌

式田和子

睡蓮の咲き小苑の芯をなす

夏燕飛ぶ四阿の軒

帰省せし吾子すつきりと丈伸びて

主自慢の白いブードル

句を案じ句を案じつつ居待月

瓢の酒をゆっくりと飲む

ウ 冬隣高層ビルの十五階

カルチャーセンター主婦であふれる

須磨明石夢に現にただよへり

出雲の神の粋なはからひ

嫌ひ抜け忘れちまへと忠告し

衝動買ひで毛皮宝石

月冴え冴え照らし出したる滑走路

透明人間サミットの席

皆んなしてこっくりさんを呼び立てる

豆大福をひとつ頬張り

閨兵の列絶え間無き花吹雪

丘の墓標に百千鳥鳴く

千町 哲 健悟 香 路子 文子 哲 香 悟 文 香 悟 文 香 路 悟 香

猫蓑会は昭和57年4月に発足しました。発足時からこの会は、朝日カルチャーセンター(A・C・C)で、東明雅先生のお教えを受けた人々の実作勉強の場とされてきました。

それから8年。明雅先生のお教えを受けたい、蕉風連句を学びたいという人の輪が拡がってまいりましたが、時間的にも距離的にもA・C・Cに通えない方々も多く、そのために人工衛星のようなサークルがたくさんできましたので、この多くの方々と交流しながら深く楽しく学ぶために、一堂に会して座を持ってはどうか、ということになり、既猫蓑会に合流していただき、会の拡大を計ろうということになりました。平成2年7月18日、文京区新江戸川公園内松声閣に於いて、第34回猫蓑会興行の前に、開かれた、誰でも参加できる猫蓑会としての設立総会を持ちました。当日、設立

準備委員会より呈出された議案はすべて出席会員のご賛成を頂きましたのでご報告申し上げます。

以下、猫蓑会規約抜粋

- 本会は猫蓑会とよぶ。
- 本会の事務所は、柏市つくしが丘2-12、東明雅方に置く。
- 本会は連句を学ぶものの会相互の連携協力及び親睦をむねとし、連句の向上を図り、蕉風連句の普及発展を目的とする。
- 本会は次のような活動を行なう。
 1. 連句会猫蓑会の開催年4回
 2. 出版活動||作品年鑑発行。年4回 猫蓑通信(仮称)を発行。
 3. その他
- 本会はこの趣旨に賛同するものの連句会をもつて組織する。本会に加盟を希

ナオ

畑を打つひと点景に画架ひろげ

うちの電話が思ひ出せない

定宿にやっとこ着いたバイク族

ポーカークフェイスで遊ぶ婆抜き

皮肉めく兼好法師恋無常

独り枕に青簾の揺れ

美しき毒蛾の我をめぐり翔ぶ

仮面と鞭が燭台の横

上弦の月山裾に傾きぬ

落鮎釣果自慢たらたら

風炉名残同門の士の老い集ふ

いちばん怖いアルツハイマー

ナウ

豪華船動くホテルと披露され

水河崩るる霰降る中

口笛を途切れ途切りに吹いてをり

穴出し蟻へ児等の眼差し

咲くを賞で散るをば賞でて花七日

夕暮れ迫る春の坂道

哲 町 悟 路 文 哲 文 哲 同 香 路 悟 香 路 香 路 香 路

望する会は、その団体名、所在地、代表者の氏名、住所、構成員を明記し、

申請するものとす。ただし所属する会の重復は妨げない。個人の入会も可。

。本会に次の役員を置く。

会長 東明雅

副会長 秋元正江、式田和子

理事 秋元正江、式田和子、下鉢清子、

杉内徒司、中川哲、福井隆秀、(アイウエオ順)

評議員 各会代表者

監事 氏原正雄

顧問 杉江杉亭 中島啓世

。役員選出は会長推薦による。任期2年

。(再任をさまたげない)。

。本会の会計は猫蓑会年会費によって賄う。

以上です。

規約に不備なところもあると思いますが、

「規約は少く、内容は充実、会の隆盛」を

モットーにして会を進めたいと理事一同思

っておりますので、ご意見のおありの方は

どうぞ理事までお申出下さいませ。

明雅先生を中心に、それぞれの会の特性

を生かしつつ、連句人口を増やし、よい作

品を残せるよう、ご一緒に学んでまいりま

しょう。なお猫蓑会は左記の通り、亀戸天

満宮を除いて、その月の第3水曜日に開催

です。平日お出にくい方はどうぞ年間のご

予定の中に組込んで頂いて、ご出席くださ

いますようお願い申上ます。

一月第三水曜(初懐紙・深川芭蕉記念館)

四月下旬 (正式俳諧・亀戸天満宮)

七月第三水曜 (深川芭蕉記念館)

十月第三水曜(正式俳諧・深川芭蕉記念館)

☆ 新刊紹介 ☆

四 序

下鉢清子

牧羊社刊 一三〇〇円

下鉢清子さんは殿村菟絲子門。鍛えに鍛えられた芸の持ち主だ。その芸は、ときにきらりと光り、ときには燻し銀のように沈潜する。旅の句にしても、日常にしても、いつも折り目正しいのも、芸の裏付けがあればこそである。見事な句集といえよう。(草間時彦)

◇ 嶋立庵の記

品川鈴子

白燕・ひより連句会

去年、連句協会のパーティーで、「天狼」句友の中島啓世氏に逢い、立話をしている処へ、氏の属する「猫衰」の方が、小アルバムを観せに来た。何気なく覗き込むと、夢ともあこがれた正式俳諧。しかも珍らしい女執筆とは、驚きと興奮のまま不躰にも

東明雅先生に頼み込む。寛容な先生は私ごとき部外者の願いを容れ、執筆の秋元正江、式田和子の両氏に引合わせて万事の便宜を図って頂くこととなる。せめてお邪魔にならぬよう、この目で再び俳諧古式を観られれば満足だと考えていたが、機会あれば馳せ参じて、見習う私を先生はじめ猫衰の皆様は内輪同然に遇して、惜しまず温かい伝授を給わった。そればかりか、持別のお図らいで、伝統の嶋立庵にて執筆の大役を務めさせて貰えたのは望外の事その折の役割に、宗匠中島啓世、脇宗匠中川哲、副宗匠福井隆秀、知司豊田好敏、副知司及座配内田麻子、座見仏淵健悟、花司山崎一恵、香元副島久美子、配硯原田千町の方々は、それ

ぞれ、重い道具や材料を遠方から携え、東先生みずからも遥々千葉から文台の大荷を運んでのご指導。杉内徒司、秋元正江、式田和子氏らのお力添えも実に細やかで有難いものだった。こうして「大淀三千風懐旧正式俳諧連歌」は、脇起り二十韻「牡丹花の」下俳諧十四句目より巻き継いで、無事に献じることが出来た。

二十一世庵主の草間時彦先生にも、感謝しきりである。当庵創立（一六六四）以来三百二十余年の歴史において、おそらく宗匠や執筆をはじめ多くの女性が務めた俳諧式は、これが初めてではなからうか。翌日の朝日新聞湘南版に写真入りで報じられた。ともあれ身にも余る花を持たせて頂き、遂に永年の念願が叶った。そう思うと夢のような気さえて、呆然と嶋立つ沢の瀬音を聞きながら、実作へと席が改まった。

不慣れた二十韻の捌きは固辞した私に、あくまでも花を持たせて下さる。東先生を筆頭に錚々たる連衆、実質私を煩わさずとも、自主捌きの態で巻き進む気くばり。この優しさに甘えて名ばかりの捌手は、名残の裏に入る辺まで執筆呆けの放心状態であった。

大淀三千風懐旧正式俳諧連歌

脇起り二十韻 牡丹花の

牡丹花の庵に巣つくれ呼子鳥 三千風仏

卯浪立浪寄する内浦 和子

釣り上げし魚拓に銘を書き入れて 好敏

また探してるコードレスフォン 千町

飲みさしのグラスにかすか月の影 杉亭

お盆に共に帰る約束 麻子

刈安に指染めながら涙ため 一恵

株式欄に一喜一憂 哲

サルタンもアラアの神にひざまつき 正江

へりで見下す石油プラント 淑子

極寒の凍土にささる青き月 和久

老狩人の掲げし銃身 文子

よく利くと朝鮮人参煎じやり 淳子

箱入むすこや々と結婚 弘子

新しき恋のダンスに夢うつつ 健悟

いつの間やら猫もうかれて 潤子

ナウ 鈴いれしお手玉上歌上手 志げ子

大声でよぶ畑鋤く人 灯人

尋めて来し常照皇寺花吹雪 啓世

黄瀬戸の皿に匂ふ草餅 執筆

平成二年五月十二日

於 大磯嶋立庵

◆ 名古屋「笹」の会

風薫る五月の空を

見上げながら

伊藤敬子

(世主宰)

二十韻「風薫る」の巻は、笹十周年を記念して催された講演会と祝賀会に、ご遠路よりご臨席いただいた東明雅先生を囲んで笹の連衆十一名(うち二名はお茶席を担当)が、東先生のご指導を受けて七年振りに巻いたものである。

昨年は芭蕉の「奥の細道の旅」三百年というので日本中が芭蕉ブームの観を呈した。芭蕉がはじめて名古屋を訪れてから三百五十年が経った、というので昨秋は井本農一先生をお迎えして名古屋市制百年の記念として講演会と句会、歌仙も巻いた。そんな経緯もあって、笹十周年を機会に二十韻の興行が予定通り行われたことは私たちにとても忘れられない記念行事の一つであった。東明雅先生もおこころよく私たちの頼みをお聞き下さり、且「風薫る」を「季刊連句」に御掲載下さるといので、連衆は一

層うれしさをかくし得ない。

五月二十六日は深夜まで行事の続きの興奮の中で過した。翌二十七日は明雅先生も早々とお顔を見せて下さり、数名で「蕉風発祥の地」をおたずね下さった。七年前、柴田白葉女先生とご一緒にこの地にお立ち下さったことなどを思い出し感慨深いものがあった。

ホテルの和室でまずお茶席に入り、お薄のお手前や香などを楽しんでから、おもむろに連句ははじめた。東明雅先生がお客様なので、まず発句をいただいた。蕉風発祥の碑「冬の日」の八木枯の身は竹芥に似たる哉 芭蕉▽が頭におありになったのだらう。八竹芥に似し人の跡風薫る 明雅▽とお出し頂いたので、七年前よりは先生もいささか風雅に凝っていらっしゃるのかしらと直感したが、昨日の余韻が誰の思いの中にもあったので八笹に胸擦る初夏の燕 敬子▽と脇をつけさせて頂いた。途中で昼食をはさみ、再びお茶、お香を聞き、あつという間に二十韻のます目は埋ってしまった。忘れられない「風薫る」の巻は友好と懐旧の思いの中で四時間を過しめでたく首尾となった。

風薫る

東明雅 捌

名古屋「蕉風発祥の地」の碑
竹芥に似し人の跡風薫る

明雅

笹に胸擦る夏の燕

敬子

香盒の蓋に紫陽花描かせて

隆子

うたげのあとのかるきたかぶり

みや子

着流しの裾もあらはに月の客

とし子

盆支度して恋ひそめし仲

鏡子

夢さめてひとり寝の床身に入みる

佳津子

コーヒーを濃くブランチの卓

有華

教会の鐘なりひびく石畳

孝位

山の深みにあやかしの沼

み

雪便り飛驒の駄菓子を買ひけり

敬

デイスコ帰りにあびる寒月

隆

自販機にまかせる暮らし留学生

と

金利自由化いつのことやら

み

道祖神肩を抱き合ひ手取り合ひ

孝

ワイングラスに惚れ薬入れ

佳

葦立ちし男のあはれしみじみと

鏡

春鮎釣りの今日もまた行く

雅

み吉野の奥の奥なる花ふぶき

敬

昼うららかに縁にまどろむ

有

平成二年五月二十七日
於 名古屋国際ホテル

◇二十韻六卷

膝送り 神田祭

薫風や 東明雅捌

膝送り 喋々の

ビル街の氏子も神田祭かな

太鼓車にかかる葉柳

握り飯形さまざま大皿に

ウ 机の下でハムスター飼ふ

バリ島の月をはがきに画き送り

ひとり酒酌む風の爽やか

新盆の読経新発意片笑窪

うしろ気にするミニのギャル達

ダイエット唱へるだけでしサイズ

ナオ 牡蛎殻の道軽く砕いて

富士望む忍野八海霜柱

弾む白球音のこだまし

銭湯をうめて爺から睨まれる

田村隆一府立三商

月の暈女つまづく梅雨穴

ナウ そればっかりはどうぞ許して

お土産をあてにOA展示会

爪先立ちで目貼り剥ぐ窓

花大樹枝をゆらして散りつづけ

亀も鳴くなり鳥も啼くなり

平成二年五月十四日

於 渋谷連句会

和子

義夫

ふみ

和

夫

み

和

夫

み

和

夫

み

和

夫

恭子

和

夫

恭

み

夫

薫風や下天は夢の大歌舞伎

柳茂りてかかかる錦絵

ワープロ機打ちてゐる窓雀来て

ウ おやつ分けあふ子供らの声

宵えびす投ぐる小判に月光り

冷き手と手抱きしめつつ

どこからか見てゐるやうな夫の瞳

パンダの前はいつも満員

ジェット機は一路故国へ流沙越え

ナオ まるごと齧る梨の歯こたへ

月登る漸くすみし厨事

えんま蟋蟀鳴きしきるなり

ベッドの灯消えてともしりてまた消えて

こぼす涙で好き好きと書く

思ひ出の遠き故郷よき時代

還暦祝ひ届く活鯛

ナウ このところランバダダンス流行りゐて

初雷に逃げるロアピル

花車居酒屋で巻く二十韻

夕となれば囲む春の炉

平成二年五月十六日

於 銀座花車

明雅

好敏

淑子

達子

敏

雅

同

達

敏

淑

達

敏

淑

雅

達

同

敏

淑

達

喋々の氷菓喃々バナナパフェ

更衣する街の賑はひ

東の間も五・七・五と指をりて

ウ 保育園児の親にそっくり

磨かれし新車を照らす望の月

今年菓敷く納屋で逢引

念仏講の一団の珠数

北河哲学通り百万遍

紅橙緑酒遠き日の夢

ナオ リタイヤの悠々閑々鶏乳む

霜娥皓々映えるゲレンデ

流し目をしても気づかぬ鈍な奴

艶歌のやうにや惚れてくれない

臓器移植待つて異国の床にあり

木彫の鳥のならぶ本棚

ナウ 三毛猫に雄というものなき不思議

欠伸ばかりが妙に春めく

金の矢でダーツをびしり花散らす

次を早くと誘ふふらここ

平成二年五月二十五日

於 錦糸町コーベベル

明雅

澄子

志げ子

和子

健悟

淑子

達子

正江

澄

雅

和

志

淑

悟

江

達

雅

澄

志

和

冷 奴 仏淵健悟 捌 青 梅 矢崎 藍 捌 万 緑 東 明雅 捌

冷奴岬の端の灯りたる

帰省の子供かこむ父母

にぎやかにあれこれ写真取り出して

ウ 郊外電車がたごとと過ぎ

マンションのここにも建ちて月高し

石榴食みつつ綴る恋文

深草の少将しのび秋深く

ナオ パッと開かぬワンタッチ傘

博覧会同工異曲懲りもせず

「反省」で売る猿の芸当

ナオ 幽玉の影ゆらゆらとゆらゆらと

玻璃戸に白き凍月を見る

婚礼を明日にひかえて湯にひたり

好きなタイプはいつも細身で

抱き上手抱かれ上手の生一本

木曾の山々かす夏雲

ナウ お守りに姿が持たせる道祖神

宅急便で送る紅鱒

新都心しづごころなく花の舞ひ

まがきの上をシャボン玉越え

平成二年五月二十八日

於 式田 邸

篤子

健悟

靖子

美奈子

篤

靖

美

篤

好敏

敏

靖

美

敏

篤

敏

靖

美

敏

悟

美

青梅の和毛をぬらす雪かな

生け垣越しに金魚売る声

村里の橋物語調べ

ウ 茶店を訪へば手作りの菓子

嬰兒のほかに笑める秋の隅

寄する松籟こぼる月影

不知火のごとき恋なり夢うつつ

誰も彼もがあの人に見え

乗り換への駅の雑踏果てしなく

ナオ おぼたりあんの敵はごきぶり

偽物の円空仏を探し出し

庵へ通ふ苔のほそみち

水鏡みつめる女の冬の月

また傷つきし心さむざむ

つげのきく顔が飲み屋においてある

猫をじゃらしつ軽い相槌

ナウ 二千五年万博候補競ひ合ひ

さなげ山麓若草の野辺

花の雲わけて来たりし奥の宮

昼のしじまに囁りを聞く

平成二年六月十九日

於 棒の手会館

好

治子

壹

道子

治

藍

好

道

藍

壹

治

道

好

藍

壹

道

壹

好

藍

治

万緑に露座の大仏濡れ給ふ

初ひぐらしの聞え来る庭

広き窓久潤を賈す客ありて

ウ 苞の茎茶に喉をうるほす

江揺れて漣の月ひろがりぬ

堅琴がよぶ鶯のくぐり戸

しのび逢ふワイン醸せし地下の部屋

小便小憎微笑して佇つ

朝市の皮はぎ丸き口そろへ

伊予万歳は手真似足真似

ナオ 旅の宿どてらの綿は重たくて

暗い山中追刺の夢

昔々小豚三匹赤頭巾

十二単の姿あざやか

紀子様のお慢料理をたのしみに

ナウ 連絡船に鷗つさくる

ほんのりと老いの消炭燃え残り

薄氷を踏む登校の道

満開の花に満月伊勢参

浅蜷蛤榮螺常節

平成二年六月二十二日

於 鎌倉おうめさま

欣二

啓世

明雅

良子

道子

世

道

二

世

良

道

良

道

良

道

世

二

良

世

雅

国民文化祭ちば91

連句大会に向かって

下鉢清子

第一回目が東京都から始められた国民文化祭も今年は五回目、既にご承知の通り当番県は愛媛、募吟の半歌仙に応募された方も多いことと思います。平成三年、つまり来年の当番県は千葉なのです。

「咲かせよう未来」

をテーマに第6回国民文化祭ちば91は、「日本の伝統文化を継承しつつ、新しい日本文化の創造を目指し、更に未来に向かって発展させていく」ことを構想の主眼としています。これを承けて、短詩型文芸の四分野（短歌・俳句・川柳・連句）の、ちば91のサブテーマは、「水と緑とうたびとたち」となりました。黒潮洗う房総の地、流れに乗って集まるものは豊かな海の幸と更に文芸も。菜の花を県花とする千葉に相応しいテーマのもとに開かれる国民文化祭に、正式に連句が参加するのは愛媛に次いで二回目、ちば91が連句発展に寄与する役割の大切さが思われます。このちば91の連

句大会を成功させたいものと、昨年より東明雅・今泉宇涯両先生は屢々県との折衝に、加えて県内の連句関係代表者の会合も頻繁に開かれ、母体となるべき連句協会千葉県支部設立の機運が熟し、去る六月十日市川市山崎製パン年基金会館で設立総会が開かれました。前夜の土砂降りの雨が上がり、

緑ひと際美しい当日には、県国民文化祭準備室より高安義郎氏が出席、県在住の連句愛好者やそのグループに所属する者五十九名が集まり、和気藹々の中に総会引き続いて連句興行を楽しみました。支部長は今泉宇涯先生、顧問は東明雅先生という豪華な顔ぶれは千葉県ならではのこと、これでは91連句大会の土台は揺るぎないものになりました。例会も毎月一回と決まった役員会も、近頃はすっかり頼しい仲間となり、

会計、事務、企画と夫々の特技を生かしつつ、ちば91へ一萬千里という運びとなっています。顧みますと連句が別名「つくばの道」と言われるようになった日本武尊の昔より、房総の地は俳諧には重要な地であったわけですが。皆様のお手許には追って大会要項が届くことと思いますが、ちば91連句大会には沢山の作品をお寄せ頂きたく、ま

日程

・平成3年11月23日 PM 1,00 ~ 20,00

房総史蹟巡りと前夜祭

(千葉ロイヤルプラザホテル)

同

11月24日 AM 9,00 ~ PM 13,00

記念講演東明雅先生・連句実作

(幕張メッセ国際会議場)

作品募集

・歌仙形式表六句、脇起不可 二巻一組

同一メンバー三組まで

・平成2年1月以降の未発表作品

応募期間

・平成3年2月1日 ~ 4月20日

多数のご参加をお待ちしています。

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 関口芭蕉庵
文京区関口二ノ一ノ三
(電) 九四一〇一四一

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーカー卜下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時
会場 新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
(電) 三四四一―一九四一(代表)

＊猫養会(会員制)年四回

(二月・四月・七月・十月第三水曜日)
会場 松声閣
文京区新江戸川公園内
(電) 九四一〇一四九

△御注意▽

柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

雁 帛 往 来

▽六月二日 松山の鈴木春山洞氏より松山大会募吟、半歌仙七三九巻送り来る。

▽六月三日 関口連句教室出席。会者十三人、二卓に分かれ歌仙興行。偶然真鍋天魚さんの「雁の会」と一緒になる。

▽六月十日 市川市駅前の山崎製パン年金基金会館に行く。連句協会千葉県支部発会。

総会のあと十一時半から二時過ぎまで九席に分かれ連句興行。

▽六月十三日 A・C・Cに出講

▽六月二十一日 電通連句部に出席。

▽六月二十二日 湘南連句会へ出席。二十韻一卷、往復の車中にて二十韻二巻を巻く。

▽六月二十四日 新庄市の内田素舟氏を迎え東京駅大丸で連句興行。二十韻二巻。

▽六月二十七日 A・C・Cに出講

▽七月一日 関口連句教室出席、会者十一人。一卓で歌仙興行。

▽七月五日・六日 筑波大学の加藤先生の案内で伊豆稲取温泉に行き、宿舍・車中で計七巻を作る。少々バテたり。

▽七月八日 柏連句会。岐阜の国島十雨宗匠が参加され、大いに盛り上がる。

▽七月十一日 A・C・C出講。

▽七月十二日 湯島「花ぶぶき」で正江・和子・健悟の外「八の会」のメンバー集まって猫養会について相談。

▽七月十八日 関口松声閣において猫養会に出席。会者四十名、歌仙七巻首尾。

▽七月十九日 電通連句部に出席。

▽七月二十五日 A・C・C出講。

季刊「連句」 第三〇号

平成二年九月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七〇一五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉原柏市酒井根六二六一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

必須の知識をすべて網羅！

初心者から研究者まで使える

本邦初の連句辞典

版
B6判
三五二頁
三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の語資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季節語辞典

日本の季節によつた言葉やスモッグ・不快指数などとして収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季節語辞典

古典俳句に使われる季節は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季節二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5一九〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5六八〇〇円

国語慣用句辞典 白五大二編 B6二二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6三三〇〇円

日本語語源辞典 堀井孝以他編 B6一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 專編 B6三三〇〇円

隠語辞典 榎根 実編 B6三八〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5一五〇〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井宗哲編 B6三三〇〇円

明治新語俗語辞典 堀島忠夫他編 B6三八〇〇円

難訓辞典 中山泰昌編 B6三三〇〇円

名乗辞典 栗本良造編 B6二八〇〇円

名数数詞辞典 森 睦彦編 B6四四〇〇円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B6二八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木紫三編 B6五八〇〇円

類語辞典 鈴木 広田編 B6二八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B6三三〇〇円

新版 文章表現辞典 藤原亨一他編 B6一八〇〇円
神島・村松編 B6二九〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741-2